

水産試験研究費「漁業資源対策研究」

アカムツ及びシリヤケイカの漁獲状況と資源動向について

吉岡拓也

近年、徳島県ではアカムツやシリヤケイカが重要な漁獲対象となっている。その一方でアカムツやシリヤケイカに関する漁獲状況や資源量、資源動向については十分に把握されていない。今後、アカムツ及びシリヤケイカの資源を有効かつ持続的に利用するためには、これらの知見が必要である。そこで、標本漁協から得られた漁獲情報をもとに、最近の漁獲状況や資源水準、資源動向を調べた。

方法

漁獲集計システムを導入している漁協を標本漁協とした。アカムツについては、平成20～30年の延縄による漁獲量およびCPUE (kg/日・隻) をもとめ、漁獲量、資源水準、資源動向を推測した。シリヤケイカについては、春季に発生した個体が秋季以降に漁獲対象となり約1年で死滅することから、11月～翌年2月を主漁期とした平成20～30年級群の小型底びき網による漁獲量およびCPUE (kg/日・隻) をもとめ、漁獲量、資源水準、資源動向を推測した。

結果

平成20～30年におけるアカムツの漁獲量とCPUEを図1に示した。漁獲量は変動が大きく、年間2.1～7.8トンで推移した。主漁期は4～9月だが、平成24年以降は他の月にもまとまった漁獲がみられるようになった。平成30年は黒潮大蛇行の影響を受け、アカムツ漁場がより沖合へ移り変わったことにより漁獲量が減少した。

シリヤケイカの平成20～30年級群の漁獲量とCPUEを図2に示した。平成30年は7月～9月に発生した台風や豪雨により、多くのシリヤケイカの卵・稚仔が死滅したと推測され、主漁期漁獲量、CPUEともに過去最低となった。

考察

大きな気候変動の影響を受け、アカムツ、シリヤケイカともに資源水準は低位、資源動向は減少となった。平成30年は漁獲圧が資源量に与えた影響は少ないと考えられるが、資源を持続的かつ有効に利用するためにも資源量や資源動向に関する情報を収集し、必要に応じて適切な対策を講じる必要がある。

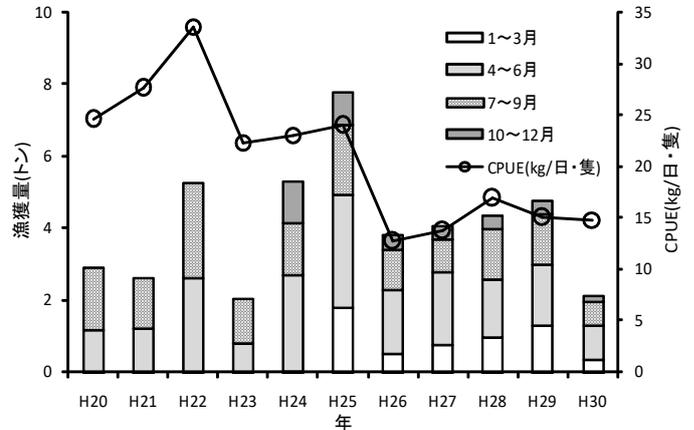


図1. 標本漁協におけるアカムツの漁獲量とCPUE。

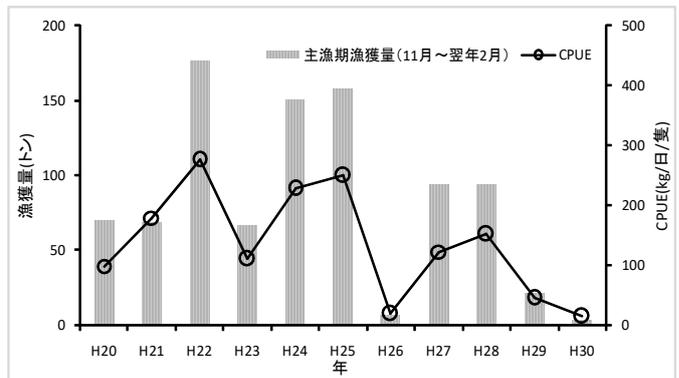


図2. 標本漁協における各年級群ごとのシリヤケイカ漁獲量とCPUE。

